

大山農場分校開校40周年記念
「まなびの碑」



大山農場分校開校40周年を記念しての碑

大山農場地区の開墾は、昭和4年10月に4戸の入植者によって開始されましたが、なかなか計画通り進まないなど困難を極めました。それでも昭和10年には総戸数が22戸となりました。しかしこの昭和10年には、未曾有の風害や野火による10戸の焼失など、大きな災難が続ききました。それらの災難を入植者のみなさんが助け合い、復興にあたられました。その後開拓地の畑作

分校の歩みが記されています。『昭和初期より第二次世界大戦にかけて、名和小学校へ通学する児童は、遠隔悪路のため、言語に絶する苦難を強いられていた。ために地元への分校開設の強い要望が台頭してきた。戦後入植者が急増し、人口増加に伴い、分校設立の要望いよいよ高まり、地区民大会を開き万場一致で分校設立運動を展開することに決した。昭和二十一年十一月二十一日名和村大字門前上岩屋ヶ平一九〇番地、日清製粉株式会社倉庫を改装、名和小学校大山農場分校として開設。教員一名児童十二名で発足した。以来、校舎の移転を重ね、昭和三十二年七月、六度目の現校舎の完成により隆々発展今日に到る。是に 開校四十周年を記念して この碑を建立す』

技術について県農事試験場の指導を受けたり、道路建設、電気導入、溜池計画、水路計画も進み、営農も安定に向かいました。終戦後の緊急開拓実施などにより農家数も順次増えました。(参考・林之峯開拓50周年記念誌)昭和61年11月に大山農場分校開校40周年を記念して建立された「まなびの碑」の碑文に、

その分校も平成10年3月22日に閉校式をおこない、本校である名和小学校に統合されました。今でも標高1776メートルの学校跡地には、子どもたちを見守った桜やイチヨウが大きく育っています。また校地入口には「大山農場分校」と記された門柱があり、体育館は「上大山地区集会所」として利用されています。(名和町歴史研究会 金田 千義)

発掘現場から

各地からもたらされたもの
中世の門前遺跡群からみる

鳥取県教育文化財団埋蔵文化財センター
名和調査事務所

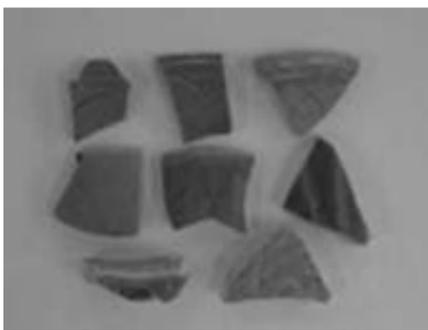
名和川の西岸に位置する門前上屋敷遺跡と門前第2遺跡は、鎌倉(南北朝時代)約6百(7百年前)の集落跡です。門前上屋敷遺跡では、堀のような深い溝や建物などの柱跡、門前第2遺跡では水田などの耕作地が見つかっています。

こうした跡などからは、多くの焼き物が出土していますが、それらを見ると、その特徴などから、いろいろな所で作られたものであることが分かります。

土師器と呼ばれる土製のものにはお皿や鍋などがあり、これらの多くはおそらく地元で作られたものでしょう。また、普段使う壺・甕、播鉢などは、常滑や越前といった東海・北陸地方や勝間田・備前などの岡山からもたらされたもの。このほかには奈良でつくられた火鉢、長崎からは滑石という柔らかい石で作られた石鍋があります。

さらに、うわ葉(釉薬)をかけられた磁器が多く出土しています(写真)。当時の日本ではこのような焼き物は作ることができず、もっぱら中国から輸入されたものでした。お椀や皿には青や白の釉薬がかけられ、模様

門前上屋敷遺跡で見つかった磁器の破片



刻まれています。このようなものの中にはかなり高級品も含まれており、またお香を焚いたであろう香炉やお茶を飲むための天目茶碗など、日常では使わない、一般の人がもたないものも見られました。

このようにひとつの遺跡を調査しただけでも、国内のみならず、海外で作られたものがあることが分かりました。

これらの焼き物は当然、人の手によってこの地に運ばれてきたものです。つまり海や陸路を通じて、当時から人々が活発に動き回っていたことを示しています。そしてものを介して多くの交流があり、おそらく様々な情報交換が行なわれていたことがうかがえます。

私の傑作コーナー

*印は新仮名

曙短歌会

- 鈴生りに実りしミカン台風は根こそぎ倒し枝を裂きたり 遠藤 定子
- * 泰山木の花の一片手につけて冷酒みたせり 澄みたる香り 金田美彌子
- 苦難のときも人に笑顔を見せられる笑顔の写真撮り続けたし 塩谷 峯子
- コンバイン刈りたる跡の陽のなかに蠶螂のそりと鎌ふりかざす 角 公邦
- 友の来て少しボケてと案じをりボケてたまるか 背筋をのばす 寺井 悦子
- * わめきたくなる程日々の過ぎ行きぬ短歌詠めぬまま迫る締め切り 寺井 悦子
- 天高し「旅はひとり」と詩人めく友と出会へり花回廊に 戸野 愛子
- * 小雨降り秋の気配となれる午後孫は宿題の夏の絵を描く 野口 律子

笹鳴句会

- 退院の吉日えらぶ竹の春 逢坂 常盤
- 海鳴りのとどいてをりし新松子 國谷 麗子
- 文化祭入選作の書を一度 砂口美二子
- 新米の掬びてこぼる光りかな 角田 久子
- 彼岸花潮の匂ひの通り雨 橋本 昭子
- 夜顔の闇を深めて白さかな 宮川 節子
- 色鳥や館に婚の鐘ひびく 美柑みつはる

みふね句会

- 捨て切れぬ端布あれこれ数珠の玉 秋山多喜子
- 初鴉や母来の国を席捲す 来海 忠満
- 放牛のたむろたむろや草紅葉 国谷 耕川
- 故郷の瀬音暮るる秋の声 高島 光代
- 一村に国旗いくつや稲架日和 津村 春水
- 休み田は風の溜り場赤のまま 中川 幸宗
- 今朝の秋鳥は鳥語で母を呼ぶ 榎田 福女
- 鐘ついて全山響く紅葉かな 松井 愛子
- 大山の腰抜け雲や菜を間引く 美柑みつはる